

自己愛傾向が援助行動に及ぼす影響

阿部 晋吾 ・ 高木 修

The Influences of Narcissism on Helping Behavior

Shingo ABE and Osamu TAKAGI

Abstract

In this study, we examined the relationship between the level of narcissism and helping behavior. Participants, 108 students, were asked to rate the Narcissistic Personality Inventory-Short Version (NPI-S), the normative attitude toward helping, helping ability, and daily helping behaviors. Results indicated that the higher the sense of superiority and competence, which was an aspect of the narcissistic personality, the higher they rated their helping ability. On the other hand, the higher the need for attention and praise, another aspect of the narcissistic personality, the more they rated positively on their normative attitude. Moreover, helping ability and the normative attitude were positively related to the daily helping behaviors. These results suggested that there would be two processes in the influences of narcissism on helping behavior.

Key Words: Narcissism, Normative Attitude toward Helping, Helping Behavior

抄 録

本研究では、対象者（108名の学生）に自己愛人格目録短縮版（NPI-S）と、援助規範意識、援助能力評価、援助行動について回答してもらい、自己愛傾向の程度によって援助行動に差異が見られるかどうかを検討した。その結果、自己愛傾向のうち、優越感・有能感が高いほど、援助能力評価が高いことが明らかとなった。また、注目・賞賛欲求が高いほど、肯定的な援助規範意識を持ちやすいことも明らかとなった。さらに、援助規範意識、援助能力評価は、援助行動に対して正の影響を及ぼしていた。これらの結果は、自己愛傾向は2つのプロセスを通じて援助行動に影響を及ぼしていることを示唆している。

キーワード：自己愛傾向、援助規範意識、援助行動

問 題

自己愛傾向とは、自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという欲求によって特徴づけられる性格特性のことである（小塩, 1998）。自己愛傾向の高い個人の特徴については、共感性（Watson, Grisham, Trotter, & Biderman, 1984）、対人恐怖（清水・岡村, 2010）、友人関係（小塩, 1999）、恋愛関係（Campbell, 1999）など、さまざまな側面から検討がなされている。対人行動の分野においては、攻撃行動との関連からの研究がよく行われており（例えば、Bushman & Baumeister, 1998; Hart & Joubert, 1996; Washburn, McMahon, King, Reinecke, & Silver, 2004）、代表的な理論として、自己本位性脅威モデル（Baumeister, Smart, & Boden, 1996）が挙げられる。この理論によると、自己愛傾向の高い個人は、自己評価が非常に高いにもかかわらず、それを支える明確な理由や根拠がないため、ささいな出来事が自尊心を低下させる原因となり、周囲の他者に対して攻撃的に反応しやすい、とされている。

この理論をもとに、阿部・高木（2006）は、自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響を、直接的な影響と、間接的な影響の2つに分けて検討した。まず、直接的な影響とは、自己愛傾向の高い個人に特有の、自分自身を特別視する傾向が自分の反応の評価にも表れるものである。「自分は特別な存在だから何をしてもよい」という尊大さによって、怒りの表出を正当だと感じやすい可能性が考えられる。次に、間接的な影響とは、自己愛傾向の高さが被害状況の認知に影響を及ぼし、結果的に正当性評価を高めるというものである。すなわち、自己本位性脅威モデルで指摘されているとおり、自己愛傾向の高い個人は同じ被害状況でも被害の大きさや相手の責任性を過大に評価しやすく、その結果として、感じる怒りも強くなり、怒りの表出を正当化しやすくなると考えられる。これらの影響過程を検証するために、場面想定法を用いた質問紙調査を行った結果、上記の予測どおり、直接、間接の2つの影響プロセスの存在が確認された。

では、攻撃行動と並んで代表的な対人行動である援助行動に対しては、自己愛傾向はどのような影響を及ぼすのであろうか。援助行動の生起過程モデルとして、Latane & Darley（1970）は、以下のようなプロセスを提案している。すなわち、1）問題が起こっていることに気づくか、2）援助が必要と判断するか、3）援助責任が自分にあると判断するか、4）有効な援助方法があるか、5）援助を実行できるか、の5段階である。

このプロセスは、援助意図に関するプロセスと、援助行動の実行に関するプロセスとに大きく二分することができる。本研究では、これら二つのプロセスに関連する認知評価過

程として、援助規範認識と、援助能力に対する自己評価を取り上げ、それらに自己愛傾向が及ぼす影響を検討する。小塩（2004）によれば、自己愛傾向は優越感・有能感、注目・賞賛欲求、自己主張性の3つの側面から構成されている。この中で、注目・賞賛欲求が高い個人は、他者からの肯定的な評価を得たいがために、社会的に望ましい行動である援助行動を積極的に行うべきであるという意識を持ちやすいと考えられる。したがって、注目・賞賛欲求は、援助規範意識に対して、正の影響を及ぼすと考えられる。次に、優越感・有能感は、自分自身の能力を高く評価する側面であるため、その一部としての援助能力に対しても正の影響を及ぼすと考えられる。その一方、自己に対する尊大さが他者の軽視につながる可能性もあり、援助規範意識に対しては負の影響を及ぼすことも考えられる。さらに、援助規範意識、援助能力評価は、その概念上、援助行動に対して正の影響を及ぼすと想定される（Figure 1）。

そこで、本研究では、以下の仮説を立てて、その検証を試みた。

仮説 1) 注目・賞賛欲求が強い個人は、援助に対して肯定的な規範意識を持っているだろう。

仮説 2) 優越感・有能感が高い個人は、自己の援助能力を高く評価し、援助に対しては否定的な規範意識を持っているだろう。

仮説 3) 援助に対する規範意識が肯定的であるほど、援助行動が生じやすいだろう。

仮説 4) 援助能力評価が高いほど、援助行動が生じやすいだろう。

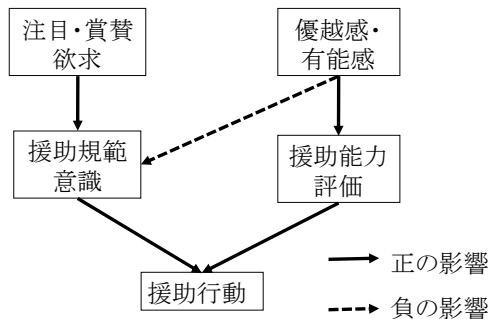


Figure 1 本研究の仮説モデル図

方 法

対象者と実施方法

女子大学生108名（年齢 $M=19.81$, $SD=1.58$ ）を対象にして、質問紙調査を実施した。調査期間は2009年7月25日～8月15日で、質問紙は講義中に集団配布し、回答後に無記名で回収した。

質問項目

1) フェイスシート：性別・年齢の記入を求めた。2) 自己愛傾向：自己愛傾向については、小塩（1999）が作成した自己愛人格目録短縮版（NPI-S）の一部を使用した。小塩（2004）の因子分析によって得た「優越感・有能感」と「注目・賞讃欲求」の各因子に高く負荷する上位各5項目、計10項目を使用した。それぞれについて「5. とてもよく当てはまる」「4. どちらかという当てはまる」「3. どちらともいえない」「2. どちらかという当てはまらないがない」「1. まったく当てはまらない」の5件法で回答を求めた。3) 援助規範意識：箱井・高木（1987）の援助規範意識尺度の一部を使用した（Table 1 参照）。この尺度は4因子、29項目で構成されているが、箱井・高木（1987）の因子分析で得た各因子に高く負荷する上位各5項目、計20項目を使用した。それぞれについて「5. 非常に賛成する」「4. 賛成する」「3. どちらともいえない」「2. 反対する」「1. 非常に反対する」の5件法で回答を求めた。4) 援助能力評価：援助能力に対する自己評価を測定するために、次の5項目で構成される尺度を独自に作成した。すなわち、「私は人を助けるのが得意だと思う」「私は人を助ける能力なら誰にも負けない」「必要な時は人を助ける自信がある」「心身ともに人を助けるための余裕がある」「自分はとても役に立つ人間だと思う」の5項目である。5項目それぞれについて「5. とてもよく当てはまる」「4. どちらかという当てはまる」「3. どちらともいえない」「2. どちらかという当てはまらない」「1. まったく当てはまらない」の5件法で回答を求めた。5) 援助行動：援助行動や親切行動など、向社会的行動をどの程度行っているかを測定するために、菊池（1998）が作成した向社会的行動尺度を使用した。20項目それぞれについて「1. したことがない」「2. 1度したことがある」「3. 数回したことがある」「4. しばしばした」「5. いつもした」の5件法で回答を求めた。

結 果

尺度の構造検討

自己愛傾向の10項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、小塩（2004）と対応した2因子構造が確認されたので、それぞれ「優越感・有能感」因子、「注目・賞讃欲求」因子と命名した。

次に、援助規範意識の20項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、解釈可能性から4因子を抽出した。

第1因子は、たとえ一方的、あるいは不公正であるにせよ、援助を授受することを肯定的にとらえる意識を表す因子と解釈された。そこで、この因子は「寛容規範意識」因子と

Table 1 援助規範意識の因子分析結果

項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4
どんな場合でも、人に迷惑をかけてはいけない	-.62	-.12	.10	.05
人の好意には甘えてもよい	.55	-.13	-.03	-.08
犯した罪を償わなくてもよい場合がある	.47	.17	-.10	.11
見返りを期待した援助など、全く価値がない	-.43	.01	-.26	-.13
自己を犠牲にしてまでも、人を助ける必要はない	.36	-.15	-.14	.19
人にかけての迷惑は、いかなる犠牲を払っても償うべきである	-.31	.28	.17	.01
自分より悪い境遇の人に何かを与えるのは当然のことである	-.20	.79	-.28	.11
社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである	.06	.60	.28	.15
しいたげられている人を、まず救うべきだ	.10	.47	.01	-.36
困っている人に、自分の持ち物を与えることは当然のことである	.15	.41	-.03	-.08
人から何かを贈られたら、同じだけお返しをすべきである	.02	-.01	.56	.06
受けた恩は必ずしも返さなくてもよい	.08	.03	-.51	.14
相手がお返しを期待していないのなら、わざわざお返しをする必要はない	.29	.06	-.43	-.09
恩人が困っている時には、自分に何があろうと助けるべきである	.10	.22	.43	-.19
私を頼りにしている人には、親切であるべきだ	-.04	-.06	.37	.25
将来付き合うことのない人なら、困っていても助ける必要はない	-.06	-.04	-.14	.57
社会の利益よりも、自分の利益を第一に考えるべきである	.17	.06	.09	.50
大勢の人が同じ状況で困っている時、まず以前私を助けてくれたことのある人を一番最初に助けるべきである	-.10	-.08	.10	.39
自分が不利になるのなら、困っている人を助けなくともよい	.09	.02	-.01	.38
人を助ける場合、相手からの感謝や返礼を期待してもよい	.22	.14	.10	.29
因子間相関				
因子1：寛容規範意識	1.00	-.25	.01	.19
因子2：弱者救済規範意識		1.00	.21	-.12
因子3：返済規範意識			1.00	-.24
因子4：自己利益規範意識				1.00

命名された。第2因子は、自分より弱い立場、悪い立場、経済的に困っている人々に対する救済、分与を指示する規範に関する意識を表す因子と解釈された。そこで、この因子は「弱者救済規範意識」因子と命名された。第3因子は、以前援助してくれた人には、親切にすべきで、傷つけてはいけないという互恵的な規範意識と、人に迷惑をかけたときにはその人に償うべきであるという補償的な規範意識を含んだ因子と解釈された。そこで、この因子は「返済規範意識」因子と命名された。第4因子は、自己利益を優先する援助規範を肯定的にとらえる意識を表す因子と解釈された。そこで、この因子は「自己利益規範意識」因子と命名された。

さらに、援助能力評価の5項目、援助行動の20項目についても同様に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、いずれの項目も正の方向に負荷する、1因子構造がそれぞれ確認された。

尺度の信頼性の検討

因子分析の結果にもとづいて、各尺度の α 係数を算出した。その結果、優越感・有能感は $\alpha = .91$ 、注目賞賛欲求は $\alpha = .81$ であった。援助規範意識の各因子については、寛容規範意識は $\alpha = .63$ 、弱者規範意識は $\alpha = .62$ 、返済規範意識は $\alpha = .55$ 、自己利益規範意識は $\alpha = .51$ であった。援助能力評価は $\alpha = .86$ であった。向社会的行動は $\alpha = .91$ であった。

仮説モデルの検討

仮説モデルの妥当性を検証するために、構造方程式モデリングによるパス解析を行った。それぞれの変数には因子得点を使用した。変数間の相関係数を Table 2 に示す。

Table 2 モデルに投入した変数間相関係数

	優越感・ 有能感	注目・賞 賛欲求	援助能力 評価	寛容	援助規範意識			援助行動
					弱者救済	返済	自己利益	
優越感・有能感	1.00	.42***	.67***	.14	.06	.09	.13	.25**
注目・賞賛欲求		1.00	.26**	.18 [†]	.12	.12	.17 [†]	.13
援助能力評価			1.00	-.02	.27**	.14	-.03	.24*
寛容				1.00	-.34**	.00	.26**	.24*
援助規範 弱者救済 意識					1.00	.22*	-.15	-.11
返済						1.00	-.32**	.21*
自己利益							1.00	-.08
援助行動								1.00

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

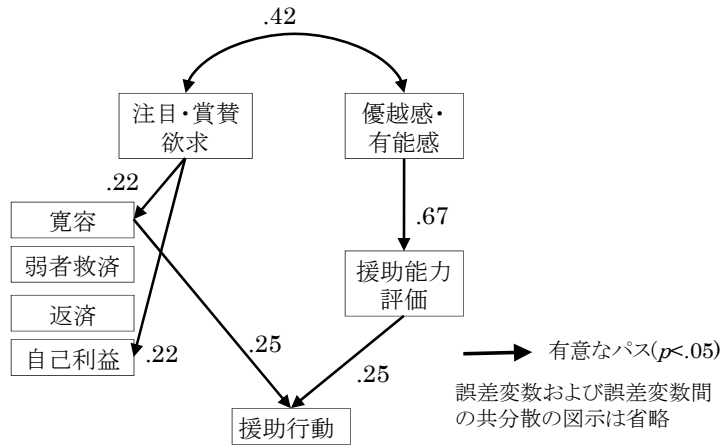


Figure 2 パス解析の結果

Figure 1 の仮説モデルに基づいて要因間にパスを設定した。また、注目・賞賛欲求と優越感・有能感の間、そして援助規範意識の各因子の誤差項同士には共分散を仮定した上で分析を行った。その際、有意でないパスがいくつかみられたので、それらのパスを消去して分析し直し、最終的に全てのパスが5%水準で有意になるまで繰り返した。その結果、Figure 2 に示したモデルが得られた。このモデルの適合度指標は、 $\chi^2(16) = 24.71$ ($p > .05$)、 $GFI = .95$ 、 $CFI = .94$ 、 $RMSEA = .07$ であり、データに対するモデルのあてはまりは良好といえる。なお、仮説では想定していない注目・賞賛欲求から援助能力評価へのパス、そして注目・賞賛欲求および優越感・有能感から援助行動への直接パスについても、確認のため設定したモデルを分析したが、これらのパスはいずれも有意ではなかった。

有意なパスのみられた影響過程について記述する。注目・賞賛欲求は寛容規範意識と自己利益規範意識に有意な正の影響を及ぼしていた。援助規範意識の内の寛容規範意識が援助行動に対して正の影響を及ぼしていた。一方、優越感・有能感は援助能力評価に正の影響を及ぼし、援助能力評価は援助行動に正の影響を及ぼしていた。仮説モデルで想定していた優越感・有能感から援助規範意識へのパスについては、いずれの因子に対しても有意なパスがみられなかった。

考 察

一部を除いて、仮説モデルはおおむね支持されたといえる。本研究の結果、注目・賞賛欲求から援助規範意識に対してのみ有意なパスがみられ、援助能力評価への有意なパスは

みられなかった。反対に、優越感・有能感からは援助能力評価に対してのみ有意なパスがみられ、援助規範意識に対しては有意なパスがみられなかった。これらの結果は、注目・賞賛欲求は規範意識優位の援助、すなわち「そうすべきだから助ける」という援助を引き起こしやすいのに対して、優越感・有能感は能力評価優位の援助、すなわち「できるから助ける」という援助を引き起こしやすいことを示唆している。なお、このいずれかが優位か、あるいは両立するかによって、被援助者に及ぼす影響、すなわち援助効果（高木、1998）も異なる可能性が考えられる。この点についてはさらなる検討が必要であろう。

一方、優越感・有能感から、援助規範意識に対しては、仮説で想定したようなパスがみられなかった。これは援助すべき他者をどのようにとらえるかによって、優越感・有能感の影響が異なるためと考えられる。つまり、自己の拡張として周囲の他者をとらえている場合には、優越感・有能感はその他者への援助に対する肯定的な規範意識を高めると考えられるが、自己とは無関係、あるいは自己と競合する存在として他者をとらえた場合には、優越感・有能感は援助に対する否定的な規範意識を高めると考えられる。本研究では援助行動の対象となる他者を特定していないため、こうした相反する影響が交絡し、有意なパスがみられなかった可能性が考えられる。援助行動の対象として想定した他者についても具体的に回答してもらったり、想定する他者を事前に一定の範囲に限定するような教示が必要だったかもしれない。

その他にも、本研究の問題点として、以下のことが挙げられる。まず、援助規範意識の各因子の内的整合性が低く、援助規範意識に関わる部分の結果の信頼性に疑問が残る。特に返済規範意識、自己利益規範意識は α 係数が低く、援助行動に対して影響力がみられなかった一因としても考えられるが、明確な結論を下すことができない。本研究では、回答者の負担軽減のために、箱井・高木（1987）の援助規範意識尺度の項目の一部のみを使用した。全項目を使用し、かつ対象者数も増やしたうえで、再度、尺度の構造と影響過程について確認する必要があるだろう。次に、今回測定した援助行動は、日常的な行動に関する自己評定尺度によるものであり、客観的な行動指標ではない。自己評定では社会的望ましさなどによって回答が歪曲されるおそれがあり、また、自己愛傾向の高低が、こうした自己評定に影響を及ぼす可能性も考えられる。今後は観察や実験室実験によって、客観的な援助行動の指標を用い、本研究と同様の結果が得られるかどうかについて検討すべきであろう。さらに、援助行動の受け手である被援助者が、援助に対してどう感じるかという、行動の他者評定を測定するという視点も必要であろう。これは他者への影響を前提とする対人行動として援助行動をとらえる場合には、最も重要な側面ともいえる。自己愛傾

向が高い個人の手による援助を、受け手はどう感じるのか、その対人的効果についても今後検討していきたい。

本研究は 第一著者の指導のもと、梅花女子大学現代人間学部に提出された蔣嵐（しょう・らん）氏の卒業論文（平成21年度提出）のデータを再分析し、加筆・修正したものである。データを提供してくれた蔣氏に感謝の意を表する。

引用文献

- 阿部晋吾・高木修（2006）. 自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響 心理学研究, 77, 170-176.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Bushman, B., & Baumeister, R. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 219-229.
- Campbell, W. K. (1999). Narcissism and romantic attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1254-1270.
- Hart, P. L., & Joubert, C. E. (1996). Narcissism and hostility. *Psychological Reports*, 79, 161-162.
- 箱井英寿・高木修（1987）. 援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較 社会心理学研究, 3, 39-47.
- 菊池章夫（1988）. 思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- Latane, B. & Darley, J. M. (1970). *The unresponsive bystander: Why doesn't we help?* New York: Appleton-Century-Crofts.
- 小塩真司（1998）. 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司（1999）. 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11.
- 小塩真司（2004）. 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 清水健司・岡村寿代（2010）. 対人恐怖心性——自己愛傾向2次元モデルにおける認知特性の検討：対人恐怖と社会恐怖の異同を通して 教育心理学研究 58, 23-33.
- 高木修（1998）. 人を助ける心：援助行動の社会心理学 サイエンス社
- Washburn, J. J., McMahon, S. D. King, C. A., Reinecke M. A., & Silver C. (2004). The relationship between aggression, narcissism, and self-esteem in Asian children and adolescents. *Journal of Youth and Adolescence*, 33, 247-26.
- Watson, P. J., Grisham, S. O., Trotter, M. V., & Biderman, M. D. (1984). Narcissism and empathy: validity evidence for the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 301-305.